

IUCN-J将来世代戦略 2024-2030



2024年3月26日会員総会にて決定

目次

1. 将来世代戦略の目的	3
2. 定義 ー将来世代の意義ある参画とは？ー	
• この戦略における将来世代とは	3
• 本戦略が扱う範囲	4
• 意義ある参画とは？	5
コラム：形骸化・お飾り・操作の例と対策	6
3. なぜ将来世代の意義ある参画を目指すのか？	
• IUCNの考え	7
• 世界・IUCNを受けてIUCN-Jの考え	8
• 将来世代の声	9
4. 将来世代戦略	11
• 目指すビジョン	10
5. 将来世代の意義ある参画のための行動計画2024-2030	12
a. 事業推進のためのガバナンスの構築	13
b. 活動枠組み/IUCN-J全体で実現したいこと	13
付録1：2023年検討体制とプロセス	14

1. 将来世代戦略の目的

IUCN-Jの将来世代戦略は、将来世代の視点をまとめ、将来世代を包摂し、必要な将来世代への支援を、IUCNおよびIUCN日本委員会に関わるあらゆる部分、あらゆるレベルにおいて、埋め込むことを目的としています。この戦略を通じて、将来世代が「自然を尊び守る公正な世界」というIUCNがめざすビジョンに有意義に貢献出来ることを明確にし、また、より強く貢献していく状況を作り上げていくことをめざします。

IUCN-Jメンバー（IUCN会員、政府、企業、ユース、サポート団体）、専門委員会、事務局には、その豊富な経験と知識と世界や日本地域に広がるネットワークを基に、この戦略を実行し、将来世代の有意義な参画を確保し、将来世代が主導するイニシアティブの支援を力強く進める事が期待されています。

2. 定義 ー将来世代の意義ある参画とは？ー

この戦略における将来世代とは

この戦略では、IUCNの定義に合わせて15歳から35歳までを「将来世代」と表現します。一般に「ユース」と称される年齢層です。多くの国際合意文書の中に含まれる“future generations”とは、つまり「今のユース」を指すと解釈して「将来世代」と表現することにしました。



15-35歳という年齢は受験や就職、結婚などライフステージの移り変わりが激しい年代です。日本では義務教育修了後の世代であり、18歳からは参政権も得られるなど社会に対して権利と責任が格段に高まります。さらに、気候変動や生物多様性保全など様々な地球規模環境問題が行動の期限と位置づける2050年には40代～60代になる世代であり、その時に住みやすい豊かな環境を享受する希望を持てるか、とんでもない環境の中で苦勞と不安を強いられるかは、まさに今自らが取る行動にかかっている世代と言えます。



IUCNでは
15-24歳をYouth
18-35歳をYoung Professional
と定義し、
まとめて15-35歳をYoung People
と表現しています

本戦略が扱う範囲

将来世代が中心的な対象です。しかし、将来世代が直面する課題は、将来世代だけで解決できるものではありません。将来世代の意義ある参画を実現するためには、**将来世代も含む社会全体の努力と支援が必要**です。そのため、本戦略には、将来世代に特化した内容と、社会全体に関する内容、世代間の対話と協力を促進する内容を含みます。名称は「将来世代戦略」ですが、「世代間戦略」を意識した実行が求められます。



将来世代と社会全体をイラストで表してみました。社会は老若男女、様々な構成員が乗った船で、将来世代はその一員です。目的地（自然を尊び守る公正な世界）にたどり着くために、世代間の対話や協力をしながら、それぞれの構成員がそれぞれの特色や能力を活かした役割を果たしています。本戦略は、社会の構成員の中でも特に将来世代が特色、能力をより発揮できるようにする（意義ある参画をする）ことで社会全体を目的地に近づけるために策定されました。

対象とする将来世代は、自然環境や環境保全を一番の関心とする将来世代に限定しません。自然保護は、防災減災、福祉・教育・地域づくり等様々な社会課題の同時解決をデザインした活動（Nature-based Solutions）として展開することが可能です。従って、本戦略はこのような社会課題の解決に関心を持つ将来世代も視野に入れます。

意義ある参画とは？

将来世代が政策や事業に関わる（「参画」と表現します）形は様々あり、扱う課題や将来世代の参画の成熟度により適切な形は変わります。ここでは、成熟度に関わらずあてはまる、将来世代の有意義な参画でない例を示します。下表で説明する「形骸化」、「お飾り」、「操作」は、意図せずに行なわれていることも多いですが、将来世代の意義ある参画の形ではありません。これらは「ユースウォッシュ」と捉えられるもので、結果は将来世代の意義ある参画に繋がらず、おそらく政策や事業の目的も達成できないという勿体ない結果になるため、意識して避けることが重要です。



形骸化 Tokenism

形式上将来世代に発言する機会を与えるが、実際には発言内容や伝え方に自由度がないこと・自らの意見を形成する機会がないこと。



お飾り Decoration

主催者が将来世代に参画の意味や意図を理解させず、何ら影響力や権限を与えないまま人目につかせること（主催者が自団体や事業等を良く見せる意図で将来世代の登壇機会が作られている）



操作 manipulation

（主催側が望む結果を得るために）将来世代に行動の意味や役割を理解させずにプロセスに参加させること。

参照：参加のはしご（ロジャー・ハート）

このようなまやかしの将来世代参画は、以下を心掛けることで避けることができます。



将来世代の意義ある参画の原則

- 目的・手法を将来世代が**自主的に**決める
(将来世代が自ら決めるもので、外部から指示されない)
- 将来世代が他の参加者と**対等な権利**を持ち、
その権利は会議等の主催者の意向に左右されないよう確保する
- 会議などでは、**席と発言権を確保**する
- 将来世代が参画の権利を行使できるよう、**予算を確保**する
- 将来世代とその他主体に対し、
説明、報告、フィードバックするメカニズムを確立する

UN Major Group for Children and Youthの
General Principle and Barriers for Meaningful Youth Engagement at the UNをもとに作成

コラム：形骸化・お飾り・操作の例と対策

シンポジウムが将来志向であることをアピールする目的で将来世代の演者を用意し、将来世代がシンポジウムの成果に何ら影響力を持たない場合、将来世代を「お飾り」と扱っていることになります。また、将来世代の参加者のインプットを取り入れていないにもかかわらず、将来世代の参加者がいたことを理由に成果物（例えば、宣言など）が将来世代にも受け入れられているものであるとしたら、将来世代にその成果物に沿った行動を求めることは、将来世代を「操作」していることになります。十分な検討と理由がない中で、「とりあえずあの人を呼んでおけば将来世代はカバーされるでしょう」と、特定の人物を繰り返し指名することは、担うべき役割についての適任性を担保できていない可能性が高く、将来世代の形だけの参画（つまり「形骸化」）になってしまいます。

このようなことを避けるためには、将来世代は参画する権利があることを明確かつ具体的に認識し、その権利の行使を妨げる要素を、社会全体が追加的なサポートを提供するなどして取り除く必要があります。資金面が最も顕著な障壁の例です。将来世代が参画するために必要な予算を確保する必要があります。ただしこれは、希望者全員の参加を支援しなければならないということではありません。例えば枠が一人分なら、その枠に入る適任者を選抜する開かれて透明性のあるプロセスを用意し、実行する必要があります。準備に時間が必要なことも認識しておく必要があります。

3. なぜ将来世代の意義ある参画を目指すのか？

IUCNの考え

“

IUCNビジョン
「自然を尊び守る公正な世界」

IUCNミッション
「自然の完全性と多様性を保全するため、
あらゆる自然の利用を公正で、
生態学的に持続可能なものとするために、
世界中の社会に影響を与え、勇気付け、支援する」

”

2023年に設立75周年を迎えたIUCNは、このビジョンとミッションを掲げています。自然保護の課題や解決策、コミュニケーション相手が、時代に合わせて変化する中で、常に次世代の視点と声を取り入れて行動できるという**多様性**と新しい力を取り入れ変わることができる**更新力**が、IUCNの強さであり、自然保護コミュニティの**健全性**を保つ上でも**重要な要素**です。

これに加え、2022年12月に開催された生物多様性条約第15回締約国会議で合意された人と自然の共生社会という2050年ビジョンを実現するための、2030年までのミッション「人々と地球のために自然を回復の道筋に乗せるために、生物多様性の損失を喰い止めるとともに反転させるための緊急の行動をとる」いわゆるネイチャーポジティブは、自然を劣化させてきた人類の歴史にない、社会変革を求める目標となっています。ネイチャーポジティブを実現するための23の**行動目標の22番目にも、将来世代の参画**が掲げられています。

将来世代は**ユニークで新鮮な視点や専門知識**を持つことに加え、**エネルギー、情熱、革新的な能力、多様なアイデア**を既存の活動に組み込み、**新しい技術、新しい情報源、新しいコミュニケーション手段**を活用して**自然保護のインパクトを拡大**させる可能性を持つなど、自然保護において担う役割と貢献は大きいと認識されています。

IUCNプログラム2021-2024を上位計画としながら、IUCNメンバー、委員会、事務局の豊富な経験と知識、そしてIUCNグローバルユースサミット2021の成果を活用し、[IUCN Youth Strategy 2022-2030 \(IUCNユース戦略\)](#)が発表されました。

世界・IUCNを受けてIUCN-Jの考え

IUCN日本委員会では、IUCNユース戦略の発表も契機としながら、これまで独自に進めてきたユースに関連した活動をより効果的に進めていくために、IUCN日本委員会将来世代戦略を策定します。

将来世代は、経験が足りないという指摘があります。しかし、それは過去の成功や失敗の体験に縛られることなく、**新しい挑戦に取組む意欲**を持てるということです。将来世代は、知識がないという指摘があります。しかし、それは、既存の活動の知見にとらわれないことを意味します。ITやAIその他の**新しい知識を自然保護活動に活かす**大きな可能性を持ちます。社会は、それぞれの課題の文脈における将来世代の持つ力を、十分に理解できてないところがあるかもしれません。その理解ができた時に、「自然を尊び守る公正な世界」に向けた活動が格段に高められると考えます。

将来世代は、未来を代表しています。将来世代の人々が持つ考え・情報・感覚・技能が、これからの「人と自然との関わり」を作り出していきます。将来世代が今から環境保全に関心を持ち取り組むことは、2030年、2050年に社会の中心として活躍する世代の中での環境保全に対する意識が高まるということです。将来世代の持続可能な社会へのトランスフォーメーション（社会変容）への参画を増すことなくして、社会全体がネイチャーポジティブひいては「自然を尊び守る公正な世界」を実現することはできないと考えます。



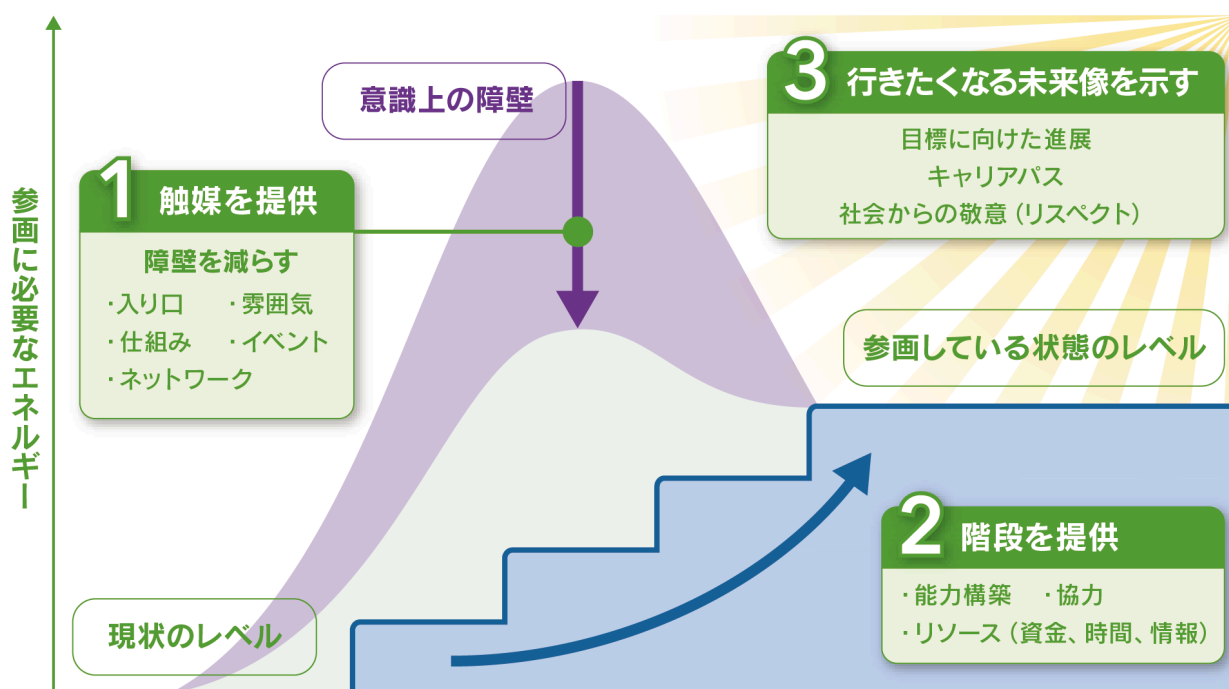
将来世代の声

気候と自然の危機は加速するばかりです。ネイチャーポジティブとカーボンニュートラル、SDGsの実現のための政策決定は、将来世代の未来の生き方に直結しています。将来世代が声を上げると、「子どもにはまだ早い・関係ない」と否定されることがあります。しかし、**将来世代も社会の一員であり、自分たちの未来を決める権利**があります。持続可能な社会に貢献できる能力は誰もが持っています。将来世代は、持続可能な社会を主体的に構築していくための成長の機会の確保や周囲からの理解・支援などの環境の整備を求めています。将来世代にとって、自分たちにも社会の一員としてできることがあるという自覚は、自分たちを勇気づけ、眠っている能力を引き出すきっかけになります。将来世代は、持続可能な社会の実現のため、IUCNの掲げるミッションやビジョンを自分たちの手で実現したいと願っています。



IUCN日本委員会では、以上を踏まえて、将来世代戦略を策定しました。この戦略の浸透を図り、行動してみて、2026年3月を目途に見直しを行ないます。

4. 将来世代戦略



将来世代戦略の構図は、化学反応に例えて理解できます。現状は、将来世代の理想の参画状態に比べて（かなり）低いところにあります。現状から理想の状態に移行するには、その差よりさらに大きな壁（化学反応に必要な活性化エネルギー）があります。この大きな壁には、実際あるもの（スキル、リソースなど）と意識上のもの（未知なことに対する不安など）があります。

この将来世代戦略は、①活性化エネルギーを下げる触媒の提供と②上昇を助ける階段の提供を進めます。同時に、そもそも多くの人が行きたいと思うような③「理想とする状態」の世代を超えたコミュニケーションも進めます。そのために、とかく暗いものになりがちな環境課題に対して、ポジティブな未来像を実現するために社会全体が動く仕掛けづくりにも取り組みます。

特に、ポジティブな未来像を示す（③）はIUCN日本委員会の会員団体の活動の本丸だと言えます。現場での活動、調査・研究、政策提言などを通じて問題解決の道を示し、語ることでできる実際のサクセスストーリーを創り出して広める必要があります。ネイチャーポジティブ、カーボンニュートラル、SDGsの達成に向かう変革を見せることにより、将来世代の関心をひきつけます。ここに将来世代の参画がなされることで、持続可能な解決策が生まれるはずです。

その上で、社会が持つ将来世代の参画を妨げる要因を取り除きます。参画したことがないことに対する不安や先入観などから来る意識上の障壁は、情報提供や一緒に取り組む仲間と繋がる機会、参画を経験する場を増やすことで下げていきます（①）。さらに、能力構築の機会の提供や活動資金支援により、効果的に参画するために必要なスキルや資金といったリソースが将来世代に備わる取組を進めます（②）。①②③の間には、不可分な関係があります。

例えば、③が①の進展につながったり、②により③の質が高まったりするでしょう。大きな環境問題があり（それに対して個人は非力であり）、それに取り組む機会も魅力も仲間も乏しい（より魅力的な事は他にたくさんある）という現状を、自分たちに備わった機会・能力・仲間があれば将来の環境は良くできるという状態に変えていくための将来世代戦略です。

目指すビジョン

- 将来世代内のリーダーやリーダーシップが強化され、社会全体の決定に参画でき、ネイチャーポジティブへ向けた活動がより大きく、より活発になっている
- 将来世代が新たな未来を創出でき、自分たちの未来に対する決定権を持っている
- 将来世代の情報へのアクセス、活動の機会、働きがいある職業としての選択肢（例、グリーンジョブ）が将来世代に豊富に確保され、変化の多いライフステージの中でも、ネイチャーポジティブに関われる機会が途切れない（または、いつでも参画できる）



5. 将来世代の意義ある参画のための行動計画2024-2030

IUCN日本委員会将来世代戦略を実行に移すのが、行動計画2024-2030(別紙参照)です。

将来世代の現状や実情（価値観・傾向等）を踏まえつつ、将来世代の参画に効果的にアプローチするために

フェーズ1：情熱・危機意識はあっても、基本的な知識・技術をまだ必要としている。

フェーズ2：情熱・危機意識を持ち、解決につながる知識・技術・社会の仕組みを理解して、自らも企画、行動を試行錯誤できる。フェーズ1のリーダーやメンターにもなれる。

フェーズ3：知識や技術、経験もあり、専門分野から研究やNGO等の中にも入りはじめ、所属する組織や社会の仕組みの変革に着手できる世代。フェーズ1、2のリーダーやメンターにもなれる。

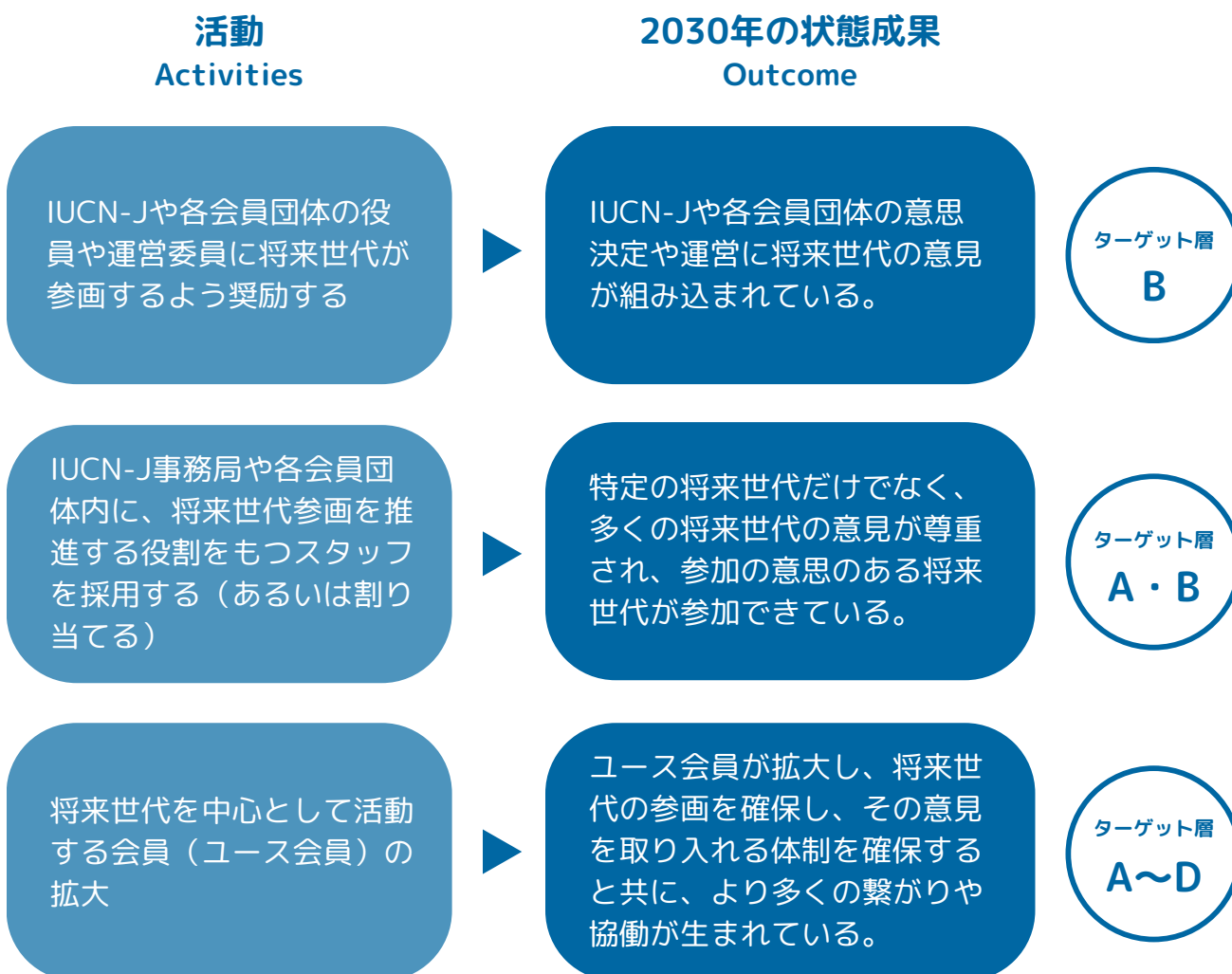
という、3つの段階を便宜上想定しています。

また、学生と社会人で状況が異なり、ライフステージの変化が大きく、へだたりがあるという現状を踏まえ、下記のように対象分けを意識し、行動していきます。

	学生	若手社会人
フェーズ3	A	B
フェーズ2	C	D
フェーズ1	E	F

a. 事業推進のためのガバナンスの構築

ガバナンス体制に将来世代が入ることで、将来世代戦略の取組を強く勧めます。



b. 活動内容/IUCN-J全体で取り組むこと

別紙：IUCN-J将来世代戦略行動計画 参照

本戦略では、課題を明確かつ正確に捉えることを目指しましたが、解決策の詳細はそれぞれの行動主体に委ねるところがよいと考えました。実際に行動して、2年後にストックテイクをして行動計画を改訂する、というのも戦略の一部です。

付録1：2023年検討体制とプロセス

IUCN-J将来世代戦略2024-2030の立案にあたって、名取洋司（IUCN-J副会長/コンサベーション・インターナショナル・ジャパン）、安藤よしの（IUCN-J副会長/ラムサールネットワーク日本）を代表に、ユース会員であるChange Our Next Decade、緋熊と黒潮が中心になって、IUCN-Jメンバーの参画を得て検討されました。

主な活動記録

2023/4/7 IUCN-Jユース戦略会議

2023/4/21 IUCNユース戦略読み合わせ

2023/6/9 IUCN-Jユース戦略会議

2023/6/22 環境パートナーシップ会議へのヒアリング

2023/7/8-9 SATOYAMAイニシアティブ国際パートナーシップ（IPSI）総会にて情報収集

2023/8/18 IUCN-CEC委員長ショーン・サウシー氏との意見交換

2023/11/9 ユース戦略ワークショップ事前打ち合わせ

2023/11/19-20 プレユースサミット参加@横浜

Global Youth Biodiversity Networkアドバイザーのメリーナ・サキヤマ氏、クリスチャン・シュバルツァー氏らとの意見交換

2023/11/25 IUCN-Jユース戦略ワークショップ（オンライン）

2023/12/13 アースデイ東京・WWFジャパンへのユース戦略ヒアリング

2023/12/15 アースデイ・エブリデイへのユース戦略ヒアリング

2023/12/19 日本環境教育フォーラムへのユース戦略ヒアリング

2023/12/21 IUCN-Jユース戦略打ち合わせ

2024/1/18 ユース戦略ワークショップ打ち合わせ

2024/2/9 ユース戦略ワークショップ事前打ち合わせ

2024/2/18 IUCN-Jユース戦略ワークショップ（全国3か所の対面会場とオンラインのサテライト型）

2024/2/20 IUCN-Jユース戦略ワークショップ振り返り

2024/2/28 戦略執筆に向けた打ち合わせ

2024/3/18 IUCN-Jメンバー向け将来世代戦略説明会



執筆に関わったメンバー（以下50音順）

秋元真理子（アースデイ東京）
安藤よしの（IUCN-J副会長/ラムサールネットワーク日本）
伊藤志帆（Change Our Next Decade/秋田国際教養大学）
稲場一華（IUCN-J事務局）
加々美薫（大同大学）
古賀瑞（Climate Youth Japan）
小林海瑠（緋熊と黒潮）
坂浦友珠（Change Our Next Decade）
芝崎瑞穂（Change Our Next Decade）
志村怜音（緋熊と黒潮）
鈴木和子（信州大学）
高田健司（Change Our Next Decade）
高橋宗嗣（経団連自然保護協議会）
多計和真（Change Our Next Decade）
道家哲平（IUCN-J副会長兼事務局長/日本自然保護協会）
名取洋司（IUCN-J副会長/コンサベーション・インターナショナル・ジャパン）
矢動丸琴子（Change Our Next Decade）

アドバイザー

秋元真理子（アースデイ東京）
伊与田昌慶（国際環境NGO 350.orgジャパン・キャンペーナー、東洋学園大学非常勤講師）
江口健介（環境パートナーシップ会議）
加藤超大（日本環境教育フォーラム）
後藤なな（日本自然保護協会）
松井宏宇（大丸有環境共生型まちづくり推進協会（エコツヴェリア協会））
宮本育昌（アースデイ・エブリデイ）
安村茂樹（WWFジャパン）

ワークショップ企画運営メンバー

安藤よしの（IUCN-J副会長/ラムサールネットワーク日本）
伊藤志帆（Change Our Next Decade）
稲場一華（IUCN-J事務局）
加々美薫（大同大学）
小林海瑠（緋熊と黒潮）
芝崎瑞穂（Change Our Next Decade）
鈴木和子（信州大学）
道家哲平（IUCN-J副会長兼事務局長/日本自然保護協会）
名取洋司（IUCN-J副会長/コンサベーション・インターナショナル・ジャパン）

2023年11月開催のIUCN-Jユースワークショップには、15名の方々に、2024年2月開催のIUCN-Jユースワークショップには、48名の方々にご参加を頂きました。御礼申し上げます。

IUCN-J将来世代戦略

2024年3月27日 初版第1刷発行

発行者 国際自然保護連合日本委員会（IUCN-J）
東京都中央区新川1-16-10 ミトヨビル2F
日本自然保護協会内
国際自然保護連合日本委員会(IUCN-J)
TEL：03-3553-4101（代表）
FAX：03-3553-0139
Mail: mail@iucn.jp
http://www.iucn.org

Suggested citation

国際自然保護連合日本委員会(2024). IUCN-J将来世代戦略2024-2030. IUCN日本委員会. 東京. p16

